

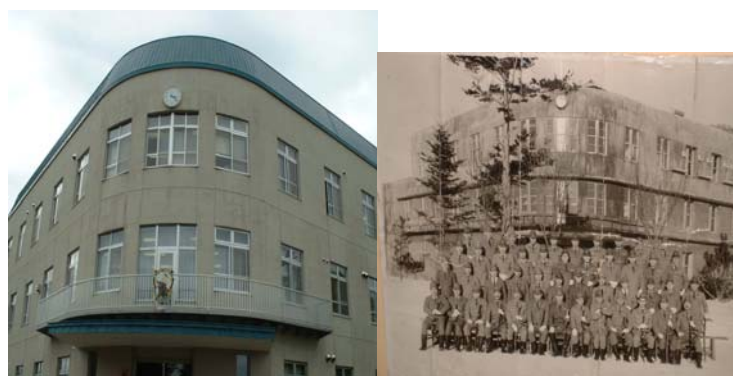
「朔東から」に於いて、朔東に関連する旧陸軍については既に紹介したが、海軍については忘れては片手落ちだろう。美幌駐屯地を訪れると否応無しに美幌航空隊を思い出さずにはおられない。美幌駐屯地の地下には金字塔をうち立てた郷土部隊の存在未発見の地下壕があってあの名機「ゼロ戦」が完璧な状態で保管されているとかと実しやかに囁かれるのである。その真偽はさておき、かつて現美幌駐屯地に所在した美幌海軍航空隊が前の対戦の開戦劈頭に輝かしい金字塔を打ち立てたことを忘れてはならないと考える。

● 美幌海軍航空隊の新編

海軍航空隊第3次補充計画に従って、朝鮮の元山、東港、鹿屋と共に新たに編成されたのが美幌海軍航空隊である。昭和12年秋には、美幌町田中部落西部地区での用地測量と用地買収が始まり、昭和13年春には、飛行場建設工事が始まった。この補充計画は、③（マルサン）計画と呼ばれ、帝国海軍が、軍縮条約の羈絆（きはん）を脱し、全く自主自由に構想した特色ある戦力造成計画であった。この計画下で建造されたのが、戦艦大和であり、武蔵であった。

尚、現在の女満別空港は、昭和10年流氷観測を目的とした飛行場であったが、昭和18年に、美幌海軍航空隊の第二基地となった。

昭和15年10月には、飛行場や庁舎・兵舎、官舎、海軍病院等の種々の施設が完成したのである。飛行場は現在の美幌駐屯地の菅庭から訓練場にかけての一带であり、庁舎は現在も第6普通科連隊の庁舎として使用されている。この庁舎、流石旧帝国海軍と言う趣のある形をしている。庁舎玄関を艦艇の舳先に見立て、そのような形になっている。艦艇のブリッジの位置が現在の連隊長室（2F）である。とりもなおさず連隊長は艦長である。また、駐屯地の中には未だに現役の海軍航空隊時代の建物等が多数あり、某大学教授が資料収集の為に訪れたこともある。



宗雪新之助大佐を司令とする美幌海軍航空隊の誕生である。『同航空隊は、昭和15年11月には、第二連合艦隊付属の第2連合航空隊に編入されたが、昭和16年には同航空隊は廃止され、第11航空艦隊が編成され、美幌航空隊はこの第11航空艦隊の第22航空

戦隊として朝鮮の元山海軍航空隊と共に編入された。この第二十二航空戦隊は、各戦線でその勇名を轟かせた猛者揃いであった。それもそのはず、中支・南支で連戦練磨の13空の勇士多数が、美幌空へ、15空の勇士達が元山空に転勤していた海鷲達でこの二航空隊が合同して出来上がったのが、第二十二航空戦隊だったのである。』(『』部分：吉武平八著「美幌海軍航空隊伝記」36p～37p)

● マレー沖海戦：女王陛下の不沈艦撃沈（残念ながら轟沈ではないようだ）

昭和16年12月8日未明の真珠湾の奇襲及び同早朝の仏領インドシナのシンゴラ・パタニー・コタバルへの上陸から始まった前の大戦においては、緒戦は日本軍は快進撃を続けた。南方作戦に於いても、開戦劈頭、日本海軍は嚇々たる戦果を上げ、今なお軍事史上に燦然とその栄光は輝いている。マレー沖海戦がそれである。『この海戦は、12月9日1500過ぎ、日本潜水艦がアナンバス諸島の北約100哩に英東方艦隊（日本では、東洋艦隊と呼んでいた）の主力を発見したことに始まり、同日午後から翌10日午後に亘り、日本のマレー方面海軍部隊と英東方艦隊との間に展開された。この海戦で、日本の基地航空兵力は、単独で、当時世界最強の不沈戦艦と言われた「プリンス・オブ・ウェルズ」を、高速戦艦「レパルス」と共に一撃のもとに撃沈し、英東方艦隊の主力を全滅させた。航行中の戦艦を航空機だけの攻撃で撃沈したのは、世界海戦史上初めてのことである。』(『』部分：戦史叢書：海軍侵攻作戦 425p) 東方艦隊の司令官フリップス提督は、上空直衛機なき状況ではあったが、仏印上陸輸送船団攻撃を企図して母港を出港北上したのである。

この海戦に、美幌海軍航空隊は、乙空襲隊として、参加している。(因みに、甲空襲部隊は、元山航空隊26機、丁空襲隊は、鹿屋航空隊26機である。) 白井中隊：8機、武田中隊：8機、大平中隊：9機、高橋中隊：8機の計33機である。前3個中隊が、爆撃隊、高橋中隊は雷撃隊である。最初に英艦隊上空に到着した攻撃隊は、白井中隊であった。レパルスに250トン爆弾が命中、火災を起こさせた。栄えある命中初弾だ。美空の各中隊は、通常爆弾を30発余りと魚雷7発による雷撃を両艦並び随伴艦に対して実施した。

攻撃は、敵戦闘機の妨害がなかったとは言え、兵家の忌み嫌う逐次攻撃、22航空戦隊の海上訓練不十分、熾烈な防御砲火、高速目標（平時訓練時の約2倍の速力等）決して容易でない条件があったが、搭乗員の士気極めて旺盛であったため、遺憾なく技量を発揮し、1403レパルス、1450プリンス・オブ・ウェルズを撃沈した。(戦史叢書：海軍航空概史 229p) この功績に対し連合艦隊司令長官山本五十六大将から感状が授けられた。この栄光の部隊も昭和18年3月ブナカナウ基地で解隊された。

惜しむらくは、本海戦の教訓として、大艦巨砲主義に決別すべきであったにも拘わらず、転換に至らなかったことだ。最も、大きな歯車を方向変換するのは容易なことではないし、ドクトリンや作戦思想を転換してもそれを可能にする戦力造成現代用語

で言えば、防衛力整備には相当の時日を要するものではある。先見の明のあった者は居たろうに！

● 爾後の美幌基地

美幌基地には、昭和19年4月第五十一航空戦隊司令部、同年七月第三十六魚雷調整班が移駐し、北方方面の守備に任じた。

昭和二十年終戦となり、連合軍ベージル隊長以下三百名が進駐し、昭和二十五年本部隊舎を利用して国立療養所が開所した。

昭和二十五年警察予備隊の発足と共に、各部隊が移駐を開始、逐次に現在の美幌駐屯地が形作られた。(美幌駐屯地の由来書から)

美幌海軍航空隊は、マレー沖海戦のみならず他の作戦にも参加しているが、その状況は割愛する。何れにしろ、美幌町は斯様に軍隊と縁の深い街であったし、その縁もあってか現在でも美幌駐屯地は殊のほか美幌町にお世話になっている。有り難い事だ。

美空に関する資料が資料館「北辰館」に多数展示してあります。ご覧になりたい方は、美幌駐屯地広報班に申し込まれたい。

(TEL : 01527-3-2114 ext281)